
milk tea

ma.na

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m i l k t e a

【Nコード】

N 1 9 3 3 G

【作者名】

m a . n a

【あらすじ】

カップリング新哀です 些細な喧嘩。素直になれない自分に…。
イメーシングは福山雅治さんのm i l k t e aで。

「今日も連絡なし・・・ね。」
柄にもないと思いつつも哀は携帯電話を見つめる。

珍しく新一と本気で喧嘩をしたのは一昨日のこと。
きっかけはいつも通りの他愛のない口論だったのに。
なんであんな事を言ってしまったんだろう。
そう、彼の言葉にカチンときてしまったのよ。

『宮野志保に戻る勇気もないヤツに・・・』

その前後は覚えていない。あまりに頭に來た。私は灰原哀であることを選んだのよ。

『貴方に私の気持ちなんて一生わからないわ！！結局貴方と私じゃ解り合うことなんて最初から無理だったんだわ！！』

しまった、と思った。

彼は私を理解しようとしてくれている。否、誰よりも理解してくれている。それなのに・・・

すぐに『御免なさい』と言えばよかった。なのにどうして素直に言えないんだろう。

こんな口下手で不器用な私を彼は精一杯愛してくれている。

『ありがとう』と本当はいつも思っているのに・・・それも伝えた事が殆どない。

その直後彼の携帯が鳴った。いつもの警察からの協力要請だ。

『はい・・・はい、そうですか・・・でもあの今は・・・・・・・・・・わかりました。直ぐに行きます』

「わりい哀・・・すぐ戻るから・・・帰ってきたらちゃんと話そう？な？」

どうしても行かなければならない依頼らしい。大方時間制限のある誘拐事件か何かだろう。

「別に。謝らなくて結構。早く仕事に行きなさいよ。」

あれからもう3日。新一は帰ってきていない。

事件を呼んでしまう体質だからそれだけで済まなかったのね。それにしても、こんなに連絡がなかったのは初めて。

どんなに忙しくても必ず家に帰ってきた。

私をひとりにするのは絶対に嫌だ、と言って。

その彼が帰ってこないどころか連絡もとれない。

いつも私が後ろ向きな事を言っても「バカだな」って笑ってたまに励ましてくれて

何も言わなくても「頑張れ」って本気で励ましてくれる。

彼がそうしてくれることに甘えすぎていたのかもしれない。

さすがに……怒らせてしまったわよね……。

今連絡があってもきつと『貴方の家なんだからいつ入っても出ても構わないわよ。いちいち連絡なんていらないわ。』なんて言うてしまっただろう。

ほんととは逢いたくて仕方ないのに。

彼がいない間、殆ど眠れていない。

流石に疲れてきたから今日は眠れそうだが……。

「夢で逢えたら泣いてしまつかも……なんてね」

私らしくない。私らしくないけれど、本当にそんな気がする。

やっべえ……哀怒ってるだろうな……。

単純な誘拐事件のはずだった。

追いつめたところまではよかったのに……哀の事を考えていたせいか人質は保護したが犯人を取り逃がしてしまい電波の届かない山奥まで来てしまった。

変な気起こしてなきやいいけど……。

やっと電波の入る所までやってきて直ぐに哀の番号をダイヤルする。

『・・・何?』

哀は直ぐに電話に出たが明らかに不機嫌だ。やべえな・・・3日も家を空けて連絡もしなかったんだ。無理もない。しかもあの喧嘩の後だ。

とりあえず生きていてくれてよかった、と安心するべきか。

「哀・・・わりい、ちよつと長引いちまって・・・夜までには帰れると思うから・・・」

『ミルクティー。』

「へ?」

『ミルクティー買ってきて。とびつきり美味しいの。』

思いもよらなかった発言。

ミルクティー?いつも珈琲だよな?

「甘いもんが欲しいのか?」

『ミルクティーよ。いつかバス停で買ってくれた缶の。』

あの日貰ったミルクティー。

もう一度貴方に貰ったらきつと素直になれる。

正直に謝って伝えよう。

私の全部、貴方だけのものよ。
ありがとう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933g/>

milk tea

2010年10月11日15時37分発行